

平安時代初期における衛府制度と儀式整備政策

大 浦 一 晃

はじめに

嵯峨天皇が弘仁格式の編纂を行い、それまで全てが揃っていないかった律令格式をすべて揃えたことは、日本古代律令制のひとつの完成段階として評価される。^①一方で、嵯峨は宮中における儀式整備を推進したことに注目される。

その一つの成果が、儀式書である『内裏式』の編纂である。古代日本における儀式・年中行事に関する研究は八〇年代以降、橋本義則氏や古瀬奈津子氏、西本昌弘氏等によって即位儀礼や元日朝賀など政治的な儀礼を中心として積極的な検討が行われてきた。^②それらの研究が体系化されるなかで儀式研究の新たな視角を示したのが大日方克己氏である。^③私は以前、大日方氏が検討を行った正月の射礼を取り上げ、その変遷と意義について考察し、各儀式書（『内裏儀式』・『内裏式』・『儀式』）の規定の差異及び社会的背景から、射礼の儀式が持つ意義が変化することを指摘した。^④特に元来、朝堂院で行われ全官人を射手の対象としていた射

礼が、平安時代以降豊楽院で行われ射手の七割近くを六衛府の者達が占めることで、衛府中心へと変化した点に注目した。^⑤しかし、中央軍事制度の中心である衛府と儀式変容の具体的な関係を究明することは課題として残った。

本稿は、射礼と五月五日節から衛府関係儀式の変容過程とその契機を抽出し、律令官司制度との関わりから儀式整備政策の一端を捉えていく。

第一章 射礼変容の過程とその契機

第一節 射礼の実態と変容過程

^⑥射礼はその成立期から平安時代初期にかけて四区分でき。ここでは弘仁年間を中心とした平安時代初期の射礼の変容過程を捉えたい。『日本後紀』・『日本紀略』・『続日本後紀』は、『続日本紀』と比較すると、射礼に関する記事を多く確認できる。奈良時代後半は、射礼が蕃客の服属を示す機能を有していた。^⑦ところが、延暦十年（七九二）以

降その参加がほとんど確認できなくなる。この状況は、廣瀬憲雄氏が渤海に対する上表・称臣要求を延暦年間以降放棄したと指摘したことに対応し、射礼の対象を変化させた^⑧と捉えられる。

この時期は場と射手についても変化がある。桓武朝における実施例を確認すると猪隈院・南院・射場・朝堂院・馬埒殿・御在所南端門外を使用し、次の平城朝においては神泉苑で行われている。このように、桓武・平城朝を通して場を固定化せず実施していた。嵯峨朝に入ると弘仁六年（八一五）以降、豊樂殿を毎年のように使用するようになり、大日方氏は『内裏式』が場を豊樂殿と規定していることから、嵯峨朝において射礼が固定化された^⑨と指摘した。

しかし、続く淳和朝においては、建礼門南庭・射宮・豊樂院・武徳殿と再び場に不安定性が生じており、場所を根拠として嵯峨朝において射礼が固定化したという結論には難点が残る。続く仁明朝に入り、豊樂殿における実施が連続するようになることを踏まえると、仁明朝を固定化の時期として捉えることが妥当であろう。射手については、

史料A『日本紀略』天長八年正月丙辰条に「親王已下参議已上、於武徳殿・閔諸衛府射礼」、五位已上不射、」とあり、親王以下五位以上が観覧者の立場にあり、衛府射礼と明記されることから天長八年段階には衛府が中心になっ

ていた。史料B『日本紀略』天長二年正月辛酉条に「勅曰、射礼者、國家大事、不可而闕、因遣右大臣於建禮門南庭、閔諸衛府」とあることから、天長年間初期には射礼が衛府を簡閲するものだという認識が存在したことは確かである。しかし、『日本紀略』天長八年正月丙辰条に五位以上の不射があえて記されることは、通例は五位以上官人の射が行われていたことを示すのではないだろうか。『内裏式』の撰進（弘仁十二年）以後であることから、五位以上という下限設定を基に実施されていたと考えられる。

以上により①豊樂殿の固定化・②六衛府の台頭・③射手身分の下限設定の登場、という三点が平安時代初期の射礼の変容の特徴として浮かび上がる。しかし、豊樂殿の固定化を仁明朝と捉えれば、淳和朝は『内裏式』の規定に従わなかったことになる。また、『内裏儀式』に存在しない下限設定が、どの時期に設けられたかという点も明瞭ではなく疑問が残る。

そこで、弘仁・承和年間における規定の中心である弘仁式・『内裏儀式』の変遷過程と実態の整合性を検討し変容過程をいま少し考察したい。

表一に確認できるように、弘仁式・『内裏式』はともに下限設定を規定しているが、両書は改正や修訂が加えられており、その規定が撰進の段階から存在したと断言できな

【表一】射礼・賭射規定変遷表

| | 場 | 射礼（正月十七日） | | 賭射（正月十八日） | |
|-------------------------------------|-------------------------------|-------------|--------|--------------------|--------|
| | | 射手 | 選抜（官人） | 選抜（衛府） | 場 |
| 養老令 （757） | 便處 | 親王以下初位以上 | 選抜（官人） | 選抜（衛府） | 場 |
| 内裏儀式 （818 以前） | 親王以下、六衛府、蕃客 | 選抜（官人） | 選抜（衛府） | 選抜（官人） | 場 |
| 弘仁式 （820 撰進 830 修訂・ 施行（1）） | 不明 （五位以上官人十名 その他不明）（2） | あり （兵部式） | 不明 | 不明（該当式目なしの可能性大）（3） | 該当式目なし |
| 内裏式 （821 撰進 833 修訂） | 親王以下五位以上、六衛府、帶刀舍人、蕃客 | 不明 | 不明 | 不明 | 該当篇目なし |
| 貞觀式 （871） | 不明 （五位以上（兵部式） その他不明）（4） | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 |
| 儀式 （873 以後） | 親王以下五位以上、六衛府、帶刀舍人、蕃客 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 |
| 延喜式 （927 完成） | 親王以下五位以上、六衛府、帶刀舍人、蕃客 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 |

- （1）弘仁式・貞觀式については、虎尾俊哉編『弘仁式貞觀式逸文集成』（国書刊行会・1992）に集成された逸文を参考した。また、該当式目の存否が確定できない場合は「不明」とした。
- （2）選抜規定より、五位以上二十人が射手として参加していたと判断できる。六衛府の参加は『内裏儀式』・『内裏式』との前後関係より実態としてあったことは間違いないが、現在確認できる弘仁式逸文より史料存在したという確証を得ないため挿入しないこととした。
- （3）貞觀式にみえる射手規定が人数を正確に記す。貞觀式は弘仁式の追加規定であるため、弘仁式には存在しなかった可能性が高いと判断できる。
- （4）五位以上の「箭」に関する規定が見えることから、五位以上が射手として参加していたことが確定できる。六衛府の参加は『内裏式』・『儀式』との前後関係より実態としてあったことは間違いないが、貞觀式逸文より史料上存在したという確証を得ないため挿入しないこととした。

い。そのため、実態にみえる状況的証拠による推察にならざるを得ないが、史料AとBを基準に一つの私見を提示したい。

Aより天長八年時期以前に下限設定が存在したことが考えられる。また、B時点において六衛を中心とすることから、五位以上官人が六衛を観覧する立場にあることが分かる。つまり、射手の下限設定は天長二年以前に遡ると考えられる。つまり、淳和朝において先に示した②・③の要素は実施されていたと言える。しかし、前稿において淳和朝に豊楽殿が使用されないのは、『内裏儀式』の「便處」規定が『内裏式』撰進段階には記されており、淳和は規定を無視したわけではなく天長十年（八三三）の修訂時に「豊楽殿」における実施が規定されたと指摘したことを踏まえ、下限設定の規定についても『内裏式』には存在しなかったことを考慮せねばならず、天長年間の実態が規定に基づいていると判断することはできないのである。すなわち、射手の下限規定が撰進段階の『内裏式』に規定されていたという判断は保留にせざるを得ない^⑬。

第二節 射礼の二重構造化とその時期

本節では射礼の二重構造化として捉えられているが、私見によれば二重構造化として捉える十八日賭射を考察する。

賭射は文字通り賭けが行われた娯楽的性格をもつ儀式である。前稿では、その特徴を場所・射手・罰酒の三点から捉えた^⑭。賭射は『内裏儀式』・『内裏式』・『儀式』には記されず、その詳細は『延喜式』・『西宮記』に頼ることになる。それらから、内裏で行うことが確認できる。しかし、表二のように承和元年（八三四）・仁壽二年（八五二）・齊衡二年（八五五）・天安元年（八五七）の事例からも必ず内裏で行っていたと確定できない。つまり、場所の問題からは「賭射」の儀式整備が行われたのは文徳朝以降であると推察できる。

射手については『延喜式』から「四衛府」と判断でき、表二の承和元年（八三四）・承和十五年（八四八）の事例にも「四衛府」とみえることから、射手は文徳朝以前から射礼よりも限定した四衛府によって担われていたと確認できる。

賭射の大きな特徴である罰酒については、『西宮記』（十八日賭射条）に「勝方將督行罰酒」とある。楊永良氏が指摘しているように、唐の射礼には罰酒があった。唐の射礼が節日に付属した饗宴的なものであったことを考慮すると、この「罰酒」規定から賭射が饗宴的な要素を多分に含むことを指摘することができる。

上記のような饗宴性と競技性を合わせ持ち四衛府が中心

【表二】国史にみえる賭射記事

本表は前稿「【表七】国史にみえる賭射」を一部改編したものである。
出典の表記については、紙幅の都合上以下のように略した。『日本紀略』||紀略、『続日本後紀』||続後、『日本文徳天皇実録』||文実

| 天皇 | 西暦 | 年月日 | 出御 | 名称 | 宮 | 場所 | 事項 | 出典 |
|----|-----|------------|----|----|----|------|------------|----|
| 淳和 | 824 | 天長元年 正・18 | | 賭射 | 平安 | 豊樂院 | 閱覽四衛府 | 紀略 |
| 仁明 | 834 | 承和元年 正・18 | ○ | 賭射 | 〃 | 豊樂院 | 閱覽四衛府 | 続後 |
| 〃 | 848 | 承和15年 正・18 | ○ | 賭射 | 〃 | 内裏射場 | 閱覽四衛府 | 〃 |
| 文徳 | 852 | 仁壽2年 正・18 | ○ | 賭射 | 〃 | 豊樂院 | 公家以白布賜勝者 | 文実 |
| 〃 | 853 | 仁壽3年 正・18 | × | 賭射 | 〃 | | 停賭射 | 〃 |
| 〃 | 854 | 齊衡元年 正・18 | × | 賭射 | 〃 | | 停賭射 | 〃 |
| 〃 | 855 | 齊衡2年 正・22 | ○ | 賭射 | 〃 | 新成殿 | | 〃 |
| 〃 | 856 | 齊衡3年 正・18 | ○ | 賭射 | 〃 | | | 〃 |
| 〃 | 857 | 天安元年 正・19 | ○ | 賭射 | 〃 | 新成殿前 | | 〃 |
| 〃 | 858 | 天安2年 2・10 | ○ | 賭射 | 〃 | | 天皇別召四衛府射手等 | 〃 |

となる賭射は、文徳朝にその記事が急増する。賭射自体は、表二から淳和朝と仁明朝においてもその実施が確認できるように、文徳朝に成立し規定が設定されたと言い切れることは困難である。

射礼の二重構造化の時期を明確にするために、射礼と賭射の規定を合わせて考察する。表一に、賭射の規定の変容を整理した。『延喜式』までその詳細な規定を得ないが、貞観式逸文に賭射における射手の人数が確認できることか

ら、貞観式において初めて賭射が規定されたと考えられる。しかし、同時期に編纂された『儀式』には、該当篇目が存在しない。儀式書は式と異なり、その儀式次第を詳細に記し、儀式の実施には欠かせないので、その儀式書に篇目が存在しないことに疑問が残る。

国史にみえる賭射は淳和朝の『日本紀略』天長元年（八二四）正月戊辰条に「賭射、右近衛・右兵衛、竝勝之」とあるのを初見とし、十七日射礼の翌日に行われていること

から、既に射礼の対をなす儀式であったと分かる。それが『儀式』に載せられていないのは、賭射の非公式性を示しているのではないか。先に示したように、賭射は饗宴性と競技性を有しており、服属儀礼のひとつである射礼とは方向性が異なる。また、天皇に近い四衛府のみに射手を限定していることなどから、賭射は国家的儀礼よりも、私的饗宴としての性格が強く、『儀式』に篇目として規定されなかったであろう。以上より、賭射が成立する時期は、淳和朝に求められる可能性が高い。本章を整理すると、衛府の中心化・儀式場所の固定化・二重構造化といった射礼変容の契機が淳和朝に求められるのではないか。ここで、射礼の検証を終え、次章では衛府が射手として中心となる「五月五日節」について考察する。

第二章 五月五日節変容の過程とその契機

第一節 五月五日節の成立

五月五日節は、養老雜令40諸節日条に「凡正月一日。七日。十六日。三月三日。五月五日。七月七日。十一月大嘗祭。皆為二節日。」とあり、節日として規定される。養老令はその詳細を記さず、奈良時代における具体的な儀式次第は明らかでないが、『内裏儀式』や『内裏式』には「観

馬射式」と記され、騎射の披露がその中心であったと思われる。平安時代における儀式次第の詳細は『内裏儀式』・『内裏式』・『儀式』・『西宮記』といった儀式書に記され、先行研究によって明らかにされており、諸衛府による騎射を伴うという特徴から、四月廿八日駒牽（以下、駒牽）・五月六日を合わせた三日間で構成されていたと捉えられる²⁰。五月五日節は三日間で構成されるが、表三に示したように『内裏儀式』では駒牽・六日儀については記されない。『内裏式』においても、駒牽の条文は見当たらず、『儀式』においてこれら三日間全てが記されることから、三日間にわたる五月五日節は、『内裏式』以降『儀式』以前にその成立が求められ、大きく弘仁から貞観年間であることが推測できる²¹。この年代を狭めるために、次に儀式構成の変容について考えたい。

五月五日節の儀式構成は大日方氏によって「①馬寮馬・国飼馬・五位以上の貢馬による走馬、②近衛兵衛による騎射、③菖蒲の献上と続命縷の下賜、④贊の献上・負態、⑤雅楽寮・近衛の奏楽、⑥種々の馬芸」の六点に大きく分別された²²。この六点の要素を基準として、それぞれの儀式次第・構成の成立がどこまで遡ることができるか、国史にみえる実態と照らし合わせその変容を捉えていくこととする。まず儀式の中心となる騎射について考察したい。『日本後

【表三】 五月五日節規定対照

| 五月五日 | 五月五日節規定 | 養老令 | 『内裏儀式』 | 弘仁式 | 『内裏式』 | 貞觀式 | 『儀式』 | 延喜式 |
|-------------|---------|----------|--------|-----------|-------|-----|--------|--|
| | | | | | | | | |
| 四月廿八日 駒牽 | | なし | なし | 馬寮式 | なし | 馬寮式 | 廿八牽駒儀 | 春宣式 左右馬式 |
| 五月五日 | | 雑令40諸節日条 | 観馬射式 | 官式 兵部式 | 観馬射式 | 近衛式 | 五月五日節儀 | 官式 大舍人式 内蔵式 内匠式 兵部式 大蔵式 大膳式下 主殿式 典樂式 内膳式 春宣式 左右近衛式 左右兵衛式 左右馬式 |
| 五月六日 | | なし | なし | 馬寮式 | 観馬射式 | 馬寮式 | 同六日儀 | 春宣式 左右近衛式 左右兵衛式 左右馬式 |

『紀』大同二年（八〇七）五月壬辰条に「大雨終日。埒地泥濘。四衛射畢。」とあり、「四衛射」と明記されることから、この時点において既に衛府が射手を務めていたことが確認できる。このことは、第一章で検討した射礼の衛府中心化

よりも早い。

さて、騎射という要素が五月五日節の要素として現れ始めるのは『続日本紀』神龜元年（七二四）五月癸亥条「天皇御三重閣中門」。観_二獵騎_一。一品已下至_二无位_一。豪富家及

左右京。五畿内。近江等国郡司并子弟兵士。庶民勇健堪^ニ裝飾者。悉令^レ奉^ニ獵騎事^一。兵士已上普賜^レ禄有^レ差。」をその初見とする。本条には、一品以下無位までの親王・官人と豪富家・左右京五畿内近江等国郡司并子弟兵士・勇健にして裝飾に堪える庶民に「獵騎」を奉らせたことが記され、この時点では衛府が騎射の射手を務めていない。つまり、衛府が射手として固定化した時期は、神龜元年から大同二年の間に求められる。

次に、菖蒲の献上と続命縷（葉玉）の下賜についてである。五月五日節の起源は、『日本書紀』推古天皇十九年（六二）夏五月五日条に「葉^ニ獵於菟田野^一。」とあり、補精強壯剤となる鹿の若角を取る獵をその初見とする。²³ここでは「葉^ニ獵」という表記がされ、獵という性質上、宮外における狩獵形態であると考えられるが、宮内における菖蒲や続命縷の貢納に関する国史記事は『続日本紀』天平十九年（七四七）五月庚辰条にみえる元正太上天皇の詔に「昔者、五日之節、常用^ニ菖蒲^一為^レ縷。此來、已停^ニ此事^一。從^レ今而後、非^ニ菖蒲縷者、勿^レ入^ニ宮中^一。」とあるのを初見とする。それ以前のある段階には、五月五日節における菖蒲の使用の意識が存在していたことがわかるが、「昔」という語が示す時期を推察することは困難である。本条が示すように菖蒲の使用がそれ以前は必ずしも通例ではなく、本条以降

通例化したと考えられる。そのため、菖蒲・続命縷の献上の固定化は、天平十九年以降であると捉えたい。

貢馬による走馬は、四月二十八日及び五月五日に行われる。²⁴貢馬は、大日方氏が指摘しているように、諸国から貢納される国飼馬と諸臣の貢馬に分けられる。²⁵『内裏儀式』及び『内裏式』には、五位以上官人による貢馬のみ確認できる。『続日本紀』大宝元年（七〇一）五月丁丑条に「令^ニ群臣五位已上^一出^ニ走馬^上。天皇臨觀焉。」とあり、大宝元年段階において五月五日の諸臣による貢馬という儀式次第が存在していた。他に『続日本紀』宝龜八年（七七七）五月丁巳条に「装馬及走馬」の貢納に関する記事しか見られないが、『日本後紀』大同元年（八〇六）正月壬辰条に「勅。永停^ニ五位已上進^ニ装馬^一。」とあり、装馬²⁶の貢納を停止する勅が出されており、貢馬が行われることが常であったと考えられる。

国飼馬については、『類聚三代格』宝龜五年（七四四）五月九日勅に「勅。供^ニ奉端五之節^一。国飼御馬。」とあることから国飼馬の貢納が宝龜以前から行われていたことが確認できる。以上の要素から貢馬の走馬という儀式構成は、宝龜五年までに固定化していたと捉えることができよう。²⁷

ここまで各儀式構成の起源を求め、国史に見える実態を

踏まえて考察してきた。しかし、先に挙げた儀式構成六点のうち、④贄の献上・負態、⑤雅楽寮・近衛の奏楽、⑥種々の馬芸の三点については、国史における直接的な記事が少なく、その成立について具体的な確証を得ることができないため、儀式書を中心に考察する。

贄の献上は、『儀式』四月廿八日牽駒儀条に記され、『儀式』が成立する貞観十四年（八七二）以前には成立していたことが伺える。また、『類聚国史』（巻七十三・歳時四）五月五日条によると、貞観七年五月五日乙酉条に「停^二端午節^一」とあり、以降貞観十八年まで停廢記事のみが連続することから、貞観七年以前には贄の献上が行われていたと考えられる。そして、負態について、大日方氏は『儀式』五月六日儀条に負態についての記述がないことから、九世紀には行われなかったとしている。^{②③}しかし、『内裏式』五月六日観馬射式には、五位已上走馬による負態が記され、氏の見解はもう少し慎重に検討すべきであろう。

また、近衛府による奏楽については、『儀式』四月二十日牽駒儀に「右近奏^二音楽^一」とあり、右近衛府が奏楽を行うことが規定される。しかし、これらの成立時期を推察することは、国史にみえる記事が限られる為、現段階では困難である。しかし、以上の検討から儀式構成の成立について、おおよその骨子を掴むことができる。

五月五日節の中で、後世まで儀式の中心となる「貢馬による走馬」・「衛府による騎射」・「菖蒲・統命縷の献上・下賜」については、固定化の時期の範囲が一番下る「貢馬による走馬」に合わせると宝龜五年までに成立したと言える。しかし、弘仁から貞観年間にかけて三日間に渡る儀式次第が固定化したことを指摘したが、その年代範囲の縮小と、その目的に関する答えを本節では導けなかった。検討を残した「種々の馬芸」という要素から、節を改めて論じたい。

第二節 五月五日節の儀式整備と分化

本節では、宝龜五年（七七四）以降の五月五日節の変遷について触れたい。『類聚国史』にみえる記事を表四に整理した。菖蒲・統命縷の献上については、ほとんど確認できない。嵯峨朝までは五月五日騎射のみ確認でき、駒牽や六日儀の記事は確認できない。三日間に渡る五月五日節の実施が確認できるのは、淳和朝の天長六年（八二九）である。つまり三日間に渡る五月五日節の成立、換言すれば五月五日節の分化は、淳和朝において確定したと言える。その理由の一つを、天長元年三月の淳和天皇詔及び公卿覆奏から窺うことができる。以下、史料 α ・ β として掲げる。^{②④}

【表四】 五月五日節變遷表

| 仁明 | | | | | 淳和 | | | | | 嵯峨 | | | | | 平城 | | 桓武 | | | | | 光仁 | | | | | | | | | | | | | |
|--------------|--------------|--------------|----------------|----------------|--------------|----------------|---------------|----------------|-------------------|------------------|--------------|--------------|--------------|--------------|------------------|--------------|--------------|--------------|--------------|---------------|-------------------|---------------|--------------|------|---------------|---------------|----------------|---------------|------------------|---------------|--------------|-------------|------|--------|----|
| 承和6 | 承和5 | 承和3 | 承和2 | 承和元 | 天長10 | 天長9 | 天長6 | 天長5 | 天長元 | 弘仁14 | 弘仁11 | 弘仁9 | 弘仁8 | 弘仁7 | 弘仁5 | 弘仁4 | 弘仁3 | 弘仁2 | 大同3 | 大同2 | 延暦25 | 延暦23 | 延暦21 | 延暦19 | 延暦18 | 延暦17 | 延暦16 | 延暦15 | 延暦14 | 延暦13 | 延暦12 | 延暦11 | 延暦10 | 宝龜8 | 年号 |
| | | | 4 28 駒牽 | 4 30 駒牽 | | | 4 20 駒牽 | 4 20 駒牽 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 貢馬 | |
| | | | | | | | | | | 5 5 畝菑蒲 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 菑蒲・続命縷 | |
| 5 5 騎射 | 5 5 騎射 | 5 5 馬射 | 5 5 馬射 | 四衛府馬射 | 5 5 馬射 | 5 5 馬射 | 4 27 馬射 | 4 27 騎射 | | 5 5 騎射 | 5 5 騎射 | 5 5 馬射 | 5 5 馬射 | 5 5 馬射 | 5 5 馬射 | 5 5 馬射 | 5 5 馬射 | 5 5 馬射 | 5 5 馬射 | 5 5 停馬射 | 5 5 四衛府 | | 5 5 騎射 | | 5 5 停馬射 | 5 5 停馬射 | 5 5 停馬射 | 5 5 停馬射 | 5 5 停馬射 | 5 5 停馬射 | 5 7 騎射 | 五日騎射・六日種々馬芸 | | | |
| | | | 6 6 種々馬芸 | 5 8 種々馬芸 | 5 6 競馬 | 5 6 種々馬芸 | 5 6 騎射 | 4 28 武徳殿 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | 3 26 公卿奏(β) | 3 8 天皇勅(α) | | | | | 4 10 右大臣上書 | | | | | | 5 4 開新馬埒・馬射 | 1 7 天皇勅 | | | | | 5 5 宴・奏樂 | 5 6 停節宴 | 5 7 五位以上貢馬 | | その他 | | | | |

史料 α 『日本紀略』天長元年三月丁巳条

詔曰、…其五月四日者、皇太后昇遐之日也、何隣忌景、違_レ恣_二良遊_一、五月之節、宜_レ從_二停廢_一、夫□_二絶窺覲_一、理資_二武備_一、防閑_二奸宄_一、實屬_二戎昭_一、國之大事不_レ可_二而闕_一、思_下欲依_レ舊事_上、以_レ闕_二人徒_上、是則居_レ安慮_レ危之道也、卿等宜_レ議奏聞_一、

史料 β 『日本紀略』天長元年三月乙亥条

公卿覆奏奏言、…爰臻_二忌月_一、停_二此娛遊_一、凡厥群臣、不_レ任_二悽感_一、但_レ馬射之道、於_レ武尤要_一、…夫九月九日者、…伏望乘_二此良節_一、以_レ臨_二射宮_一、…

これらの史料は、五月四日が皇太后（淳和天皇の母旅子）の没した日であるため、忌日の翌日である五月五日節を廃するか否かに関して、淳和が公卿等に問うた状況を記したものである。史料 α 実線部に「良遊」とあり、淳和は五月五日節を遊びとして認識している。一方で、史料 α 点線部中に「閑人徒」とあるように、武備の閑覧のために国家の大事として欠かすべきではないとしている。³⁰同様に、史料 β 実線部には公卿が五月五日節を「娛遊」と称しているが、点線部では馬射が武において要であるとしており、最終的に九月九日節に改めて実施するべきことを進言している。

しかし、九月九日に改めることはなく、表四から確認できるように天長元年以降五月五日節そのものが停廢された。ところが、天長五年には四月二十七日に日移して再開され、直後の天長六年に分化が表れることは注目すべき点であろう。天長元年時点では、朝廷内に五月五日節に対する「国家儀礼としての重要性」と「良遊としての娯楽性」という二つの認識が混在しており、天長六年の三日間に渡る儀式分化の登場は、その混在を整理し娯楽性を五月六日に分離することによって、五月五日節の再構築を図った儀式整備の一端であったと言える。

この再構築を示す根拠が前節の最後に掲げた「種々の馬芸」についてである。大日方氏は、『内裏式』・『儀式』・『西宮記』を総合的に検討した結果、五月五日節を前節で示した六点に分類した。³¹儀式書にみえる馬射規定の表現を整理してみると（表五）、「種種馬芸」と記すのは『内裏式』五月六日観馬射式のみであり、『内裏儀式』・『儀式』には確認できない。『儀式』において『内裏式』の「種種馬芸」に該当する部分は「諸衛雜戲」と記される。大日方氏は、『西宮記』に「雜戲」と記される部分から、その内容を引き出しているが、その雜戲には馬に関わらないものの娯乐的な芸が含まれていたことが確認できる。³²そうした雜戲に該当するものとして、『内裏式』が記している「種種馬芸」

【表五】各儀式書における馬射規定表記

| | | 五月五日儀 | |
|--------|----------|--------|--|
| | 篇目名 | 馬射規定表記 | |
| 『内裏儀式』 | 五月五日觀馬射式 | 衛府馬芸 | |
| 『内裏式』 | 五月五日觀馬射式 | 衛府馬芸 | |
| 『儀式』 | 五月五日節儀 | 左近衛府馳射 | |

| | | 五月六日儀 | |
|-----|--------|--------|--|
| | 篇目名 | 馬射規定表記 | |
| | 該当篇目なし | | |
| | 六日觀馬射式 | 種種馬芸 | |
| 六日儀 | | 諸衛雜戲 | |

についても、娯楽的な馬芸が行われていたと考えられる。以上のように『内裏式』・『儀式』から五月六日儀に娯楽的要素を確認することができる。一方で、『内裏儀式』には五月六日に相当する篇目を確認できなが、もともと五月五日節には娯楽性と重要性が混在していたことを考えると、『内裏儀式』に記される「衛府馬芸」は娯楽的要素を多分に含んでいたと考えてもよいのではなからうか。すると『内裏式』五月五日觀馬射式にも同様に「衛府馬芸」と記されるものの、これは五月六日儀に娯楽的な馬芸を移行したあとの、衛府による騎射の披露及び武力の検閲そのものを指す記述と捉えるべきであり、『内裏儀式』の表記とは質を異にすると言えるだろう。以上を踏まえれば、『儀式』五月五日節儀にある「馳射」という表現は、「芸」という

表記を抜くことで騎射そのものを表現することになったのであり、国家儀礼と娯楽性の明確な分化を目的とした儀式整備の一つの完成形であると言える。以上より、『内裏式』によって五月五日節の分化が整備されたと考えられる。しかし、『内裏式』の完成は弘仁十二年（八二二）であり、分化が始まる天長六年（八二九）よりも前にあたることの問題となる。弘仁十二年段階で五月六日儀が分化して成立していたとすれば、天長元年の淳和詔にみえる娯楽性の混在という事態は表れなかったはずである。従って、五月六日規定は天長六年以降の実態を基に、天長十年の『内裏式』修訂時に加えられたと考えることが妥当であり、正確には『内裏式』修訂によって分化が整備されたと捉えるべきだろう。

ここまでの検討を整理すると、五月五日節の変容の契機は、その分化時期である淳和朝に求められる。また、本節で得た結論から、前章で指摘した賭射が淳和朝を初見とする意味についても、娯楽性の分離という意味で理解できる。

淳和朝は、弘仁式・『内裏式』の完成から約十年程度で行われた改正・修訂へ至る過渡期にあたる。従来指摘されているように、嵯峨朝において弘仁式の整備や『内裏式』による儀式整備政策が推進されたことは大きく注目すべき点である。しかし、淳和朝の『内裏式』修訂及び仁明朝の弘仁式改正を含めた観点から、儀式整備政策を捉えることが必要である。

第三章 平安時代初期における衛府制度と儀式整備政策

第一節 嵯峨・淳和朝の上級官人と衛府制度

本章では、淳和朝を中心に儀式の変容と当該期における衛府制度の関連について考察する。

平安時代初期は左右近衛・左右衛門・左右兵衛によって構成されるいわゆる「六衛府制」と称される衛府制度が定着した時代であったが、その構成員たる舍人や門部・衛士の姿を捉えることは史料が少なく困難である。そこで、本稿では衛府上級官人の構成から課題に迫る。従来、衛府上

級官人の構成については、対象となる時代を広汎に設定し、その任官状況を比較することにより考察されている。^{③④}しかし、本章は平安時代初期、特に前章までの検討から淳和朝という約十年間の狭い時期を対象とする。そのため、上級官人全体と比較することで、この時期における衛府上級官人の特質を捉えてみたい。

淳和朝の上級官人については、既に福井俊彦氏により詳細な検討が行われている。^⑤氏が明らかにした淳和朝官人の特質は、大きく次の四点に分けられる。①嵯峨派官人と淳和派官人の別、②淳和即位直後の昇進が目立つ、③淳和東宮時代の東宮下級官人（旧臣・藩邸の旧臣）が多い、④近衛府将官の公卿昇進の官としての性格である。

本節ではこれらを前提としながら、淳和朝官人の特質について再考したい。『公卿補任』より淳和朝の上級官人（参議以上の議政官）を表六に整理した。表六において注目すべき点は、福井氏のいう①嵯峨派・淳和派官人の別についてである。福井氏による嵯峨派官人の定義は、「嵯峨朝において重用され、淳和朝でうとんぜられ、仁明朝において再び重用されたことが必要条件となってくる」^⑥である。しかし、氏も指摘しているように、この条件の該当者は限られる。そこで今回の検討においては、嵯峨朝（弘仁十三年（八二二）以前）より参議以上に登用され、淳和朝にお

【表六】 淳和朝の公卿構成

| | 左大臣 | | 右大臣 | | 大納言 | | 中納言 | | 参議 | |
|----------------|------|---|------|---|------|---|--------------------------------|------------------|---|--|
| 弘仁 13 | | | 藤原冬嗣 | D | 藤原緒嗣 | E | 文室綿麻呂 良峯安世 藤原貞嗣 藤原三守▲ | F F F F | 春原五百枝 多治比今麻呂 直世王 小野峯守 橘常主 藤原真夏△ 紀 百繼◇ | F F H上 H下 H下 G下 F |
| 弘仁 14 | | | 藤原冬嗣 | C | 藤原緒嗣 | D | 文室綿麻呂 良峯安世 藤原貞嗣 藤原三守 | F F F F | 春原五百枝 多治比今麻呂 直世王 藤原道雄 小野峯守 橘常主 大伴国道 清原夏野 藤原真夏△ 紀 百繼◇ | F F H上 H上 H下 H下 H下 H下 F F |
| 弘仁 15 (天長元) | | | 藤原冬嗣 | C | 藤原緒嗣 | D | 良峯安世 藤原貞嗣 藤原三守△ | 紀 F 紀 | 春原五百枝 多治比今麻呂 直世王 小野峯守 橘 常主 清原夏野 大伴国道 藤原真夏△ 紀 百繼◇ | F F H上 H下 H下 H下 H下 F F |
| 天長 2 | 藤原冬嗣 | C | 藤原緒嗣 | D | | | 良峯安世 清原夏野 藤原三守△ | E 紀 E | 春原五百枝 多治比今麻呂 直世王 藤原綱繼 小野峯守 橘 常主 大伴国道 南淵弘真 藤原真夏△ 紀 百繼◇ | F F H上 H上 H下 H下 H下 H下 F F |
| 天長 3 | 藤原冬嗣 | C | 藤原緒嗣 | D | | | 良峯安世 清原夏野 藤原三守△ | E F E | 春原五百枝 直世王 藤原綱繼 大伴国道 小野峯守 橘 常主 南淵弘真 藤原愛亮 藤原真夏△ 紀 百繼◇ 藤原繼盛 佐伯永繼 藤原繼業◇ | F H上 H上 H上 H下 H下 H下 H下 F F F F F |
| | | | | | | | | | | |

| | | | | | | | | | |
|------|--|-------------|---|-----------------------|-------------|-----------------------|-------------|--|--|
| 天長 4 | | <u>藤原緒嗣</u> | D | | | 良峯安世 清原夏野 藤原三守△ | E F E | 春原五百枝 直世王 藤原綱繼 大伴国道 小野峯守 藤原愛発 南淵弘貞 藤原真夏△ 紀 百繼◇ 藤原繼彦◇ 佐伯永繼◇ 藤原繼業◇ | F H上 H上 H上 H上 HT HT F F F F |
| 天長 5 | | <u>藤原緒嗣</u> | D | 良峯安世 藤原三守 清原夏野▲ | E E F | | | 春原五百枝 直世王 大伴国道 小野峯守 南淵弘貞 藤原愛発 三原春上 藤原吉野 藤原真夏△ 藤原綱繼△ 紀 百繼◇ 藤原繼彦◇ 佐伯永繼◇ 藤原繼業◇ | F G下 H上 H上 H上 HT HT HT F G下 F F F F |
| 天長 6 | | <u>藤原緒嗣</u> | D | 良峯安世 藤原三守 清原夏野▲ | E E F | | | 春原五百枝 直世王 小野峯守 南淵弘貞 藤原愛発 三原春上 藤原吉野 藤原真夏△ 藤原綱繼△ 紀 百繼◇ 藤原繼業◇ | G G下 H上 H上 HT HT HT F G下 F F |
| 天長 7 | | <u>藤原緒嗣</u> | D | 良峯安世 藤原三守 清原夏野 | E E F | 直世王 | F | 小野峯守 南淵弘貞 藤原愛発 三原春上 藤原吉野 文室秋斗 藤原真夏△ 藤原綱繼△ 紀 百繼◇ 藤原繼業◇ 藤原淨本◇ | H上 H上 H上 HT HT HT F G下 F F F |
| | | | | | | | | | |

| | | | | | | | | | | |
|----------------|-------------|---|-------------|---|----------------------------|--------|------------------------------------|------------------|--|--|
| 天長 8 | | | <u>藤原緒嗣</u> | D | <u>藤原三守</u> <u>清原夏野</u> | E F | <u>直世王</u> | F | 南淵弘貞 藤原愛発 藤原吉野 源 信 三原春上 文室秋津 清原長谷 藤原常嗣 藤原綱継△ 紀 百継◇ 藤原継業◇ 源 常◇ | G下 G下 G下 H上 H下 H下 H下 H下 F F F |
| 天長 9 | <u>藤原緒嗣</u> | D | <u>清原夏野</u> | E | <u>藤原三守</u> | E | <u>直世王</u> 源 常 藤原愛発 藤原吉野▲ | F F F F | 南淵弘貞 源 信 三原春上 文室秋津 清原長谷 藤原常嗣 藤原綱継△ 紀 百継◇ 藤原継業◇ 源 定◇ | F H上 H上 H上 H下 H下 E E F F |
| 天長 10 | <u>藤原緒嗣</u> | D | <u>清原夏野</u> | E | <u>藤原三守</u> | E | <u>直世王</u> 源 常 藤原愛発 藤原吉野▲ | F F F F | 南淵弘貞 橘 氏公 源 定 源 信 朝野鹿取 三原春上 文室秋津 清原長谷 藤原常嗣 藤原綱継△ 紀 百継◇ 藤原継業◇ | F F F G下 H上 H下 H下 H下 H下 E E F |
| | | | | | | | | | ※ (1) | |
| 天長 11 (承和元) | <u>藤原緒嗣</u> | C | <u>清原夏野</u> | D | <u>藤原三守</u> | D | 源 常 藤原吉野 直世王 藤原愛発 | E E F F | 橘 氏公 源 定 源 信 三原春上 朝野鹿取 文室秋津 清原長谷 藤原常嗣 藤原良房 藤原綱継△ 紀 百継◇ 藤原継業◇ | F F F G下 H上 H上 H上 H上 H下 E D F |

| | | | | | | | | | | |
|------|------|---|------|---|------|---|------------------------------|------------------|--|--|
| 承和 2 | 藤原緒嗣 | C | 清原夏野 | D | 藤原三守 | D | 源 常 藤原吉野 藤原愛発 藤原良房▲ | E E F F | 紀 百継 極 氏公 源 定 源 信 三原春上 朝野藤取 文室秋津 藤原常嗣 藤原綱継△ 藤原維業◇ | D F F F G下 H上 H上 H上 E F |
|------|------|---|------|---|------|---|------------------------------|------------------|--|--|

※ (1)

天長 10 年の三原春上と文室秋津の位階は「従四位下 (H下)」とある。しかし、前年 (天長 9) の位階が「従四位上 (H上)」、後年 (天長 11) の位階が三原春上「正四位下 (G下)」・文室秋津「従四位上 (H上)」とあることから、天長 10 年における彼らの最終位階は「従四位上 (H上)」である可能性が高い。また、『公卿補任』淳和天皇 (天長 10 年) 三原春上の項には、「正月七日正四位下。」と記されること、『類聚国史』(巻九十九、職官四、叙位四) 天長 10 年正月乙未条に「前略・従四位上三原朝臣春上正四位下…後略」とあることから、天長 10 年に昇位していたことは間違いないだろう。本表は『公卿補任』に従い全てを記したが誤植の可能性が高く、上記の検討から天長 10 年の最終位階は、三原春上「正四位下 (G下)」・文室秋津「従四位上 (H上)」とすることが妥当であろう。

〔凡例〕

本表は、国史大系『公卿補任』を基に作成した。淳和朝は、弘仁 14 年 4 月～天長 10 年 2 月をその治世とするが、比較の都合により嵯峨天皇弘仁 13 年から仁明天皇承和 2 年まで記した。年中の役職・位階の移動は省略し、最終官職・位階のみを記す。紙幅の都合上、記号によって表記した点がある。表中の記号の意味は以下に示す通りである。

〔 位階・官職 〕

- ・ A＝正一位、B＝従一位、C＝正二位、D＝従二位、E＝正三位、F＝従三位、G＝正四位、H＝従四位 (上下の別がある場合は、「H上」＝「従四位上」のように記す。)
- ・ 位階が前年より昇位している場合は、網かけにより示す。
- ・ 弘仁 13 年以降、初めて参議に登用された者も網かけにより示す。

〔権官、前官、非官〕

- ・ 権官＝▲、前官＝△、非官＝◇

〔 派閥 〕

- ・ 嵯峨派＝波線、淳和派＝ゴシック太字

(嵯峨派・淳和派の別は、福井俊彦氏によって明らかにされている定義を基準とした。(福井俊彦『淳和朝の官人』(早稲田大学高等学院『研究年誌』11、1966 年)／同氏『淳和朝の嵯峨派官人』『史観』第 126 号、1992 年))

また、福井氏の定義によって嵯峨派から除外されたが、嵯峨天皇の治世 (弘仁 13 年以前) において参議以上の任にあった者は、氏名の下に二重傍線を附した。

いて（弘仁十四年（八二三）以降）も継続して参議以上の任にあった者は嵯峨派官人として広く捉えたい³⁸。

このような視角から、各年における嵯峨派官人の割合を導くと、弘仁十四年…八一%（七七%）、弘仁十五年…八六%（八二%）、天長二年…七三%（六六%）、天長三年…五六%（五八%）、天長四年…五〇%（五〇%）、天長五年…五〇%（五〇%）、天長六年…五三%（五五%）、天長七年…四四%（四五%）、天長八年…二五%（二五%）、天長九年…二四%（二三%）、天長十年…二六%（三一%）と整理できる³⁹。

嵯峨派の割合が過半数を切るのは、天長七年（八三〇）であり、事実上の淳和政権と称するべき体制は天長七年を境として完成体に近づいたと捉えることができる。天長七年にそれまで権大納言であった清原夏野が大納言になっていることや、天長八年（八三一）に、南淵弘貞・藤原愛発・藤原吉野ら参議の淳和派三名が揃って従四位上から正四位下へ昇進して参議内における高位を淳和派が独占したこと、同年以降に嵯峨派が四分の一を切る急激な減少をみせていることもその傾向を示していると言えよう。福井氏による②の指摘については、個々の昇進が確認できるものの、参議以上の議政官クラスにおいて淳和派官人が台頭し始めるのは、天長七年まで待たなければならぬことを注意して

おくべきだろう。

次に、今回の課題とする衛府の上級官人について確認したい。この時期の近衛府上級官人の構成については、福井氏が既に整理しているが、衛門府・兵衛府は残されたままである。本稿では、福井氏の整理以降刊行された『近衛府補任 第一』・『衛門府補任』を参照し、近衛府・衛門府上級官人を表七に整理した。六衛府の中でも下位にあたる兵衛府については、史料に確認できる例が少なく不明な点が多いため、表七には含めず『公卿補任』等から確認できる事例を必要に応じて掲げる。

さて、淳和朝の近衛府上級官人の特徴は、既に指摘されているように二つに捉えることができる。第一点は、良峯安世や清原夏野・藤原吉野・大野真鷹など春宮坊官人（藩邸の旧臣）として皇太弟大伴皇子（淳和天皇）に仕えた人物が多いこと⁴⁰。第二に、右近衛府について貴族的性格が見え始めること⁴¹。これらは、笹山氏が述べる「天皇の私的な軍将としての性格」を示す。では、現実的に淳和の私的な軍将としての性格が見え始めた時期はいつであろうか。福井氏は「淳和天皇の即位後一斉に衛府なканずく近衛府の官人となって再び淳和天皇に近侍したのである。そして左右近衛府はほぼ完全に淳和派によって掌握され、…」と、淳和即位直後をその時期として捉えている。確かに、表七

【表七】 淳和朝における衛府官人補任表

| | | 左近衛 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | | 左衛門 | |
|--|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|
|--|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|

からも即位直後に将官に任命された者には清原夏野・藤原吉野・藤原家雄といった淳和派官人とされる者達が含まれる。しかし、左大将は藤原冬嗣、右大将は良峯安世と嵯峨派によって抑えられており、また、右中将に嵯峨派の橘氏公がいることから、淳和派による近衛府将官の掌握はそれほど容易に行われたわけではなかったと考えられる。

この点は仁明天皇即位直後の近衛府将官の任命状況と比較することで、より明瞭になる。仁明天皇は嵯峨天皇皇子であるが、天長十年の即位直後に近衛府将官のうち左大将（清原夏野）を除く役職に権官という地位を使用しつつも嵯峨派（仁明派）官人を配置している。これらは橘岑継・橘氏公・藤原助・藤原富士麻呂といった、嵯峨派官人の父子及び春宮坊官人として仁明に皇太子時代から仕えていた者達である。このような動きは衛門府にも確認できる。百濟勝義という、嵯峨朝で左衛門佐であったが淳和朝では衛府官人に名を連ねない者が、仁明即位直後に左衛門督に任じられており、藤原冬嗣長男である良長が左衛門佐に任じられている。このような仁明即位直後の嵯峨、仁明派の台頭と比較すると、淳和による近衛府将官の掌握は、もう少し時期を広げて捉える必要があり、橘氏公が衛府官人から消える天長二年（八二五）が、一つの契機であると言える。しかし、左右大将を淳和派官人で占めることで淳和に

よる近衛府掌握が完成したとすれば、良峯安世が逝去し藤原吉野が右大将に任命される天長七年（八三〇）を待たなければならぬ。⁴⁹安世の逝去という偶然的要素が絡んではいるが、先に指摘した参議以上の議政官クラスにおける淳和派官人の台頭状況を踏まえると、いわゆる淳和政権と呼ぶべきものの確立の時期は、天長七年前後に求めることが妥当であろう。

このような淳和朝の推移と衛府関係儀式変容がどのように関連したか、節を改めて論じたい。

第二節 衛府上級官人と儀式整備政策

『内裏式』の修訂は天長十年（八三三）であり、淳和朝末にあたる。本節は、淳和朝における『内裏式』修訂という儀式整備政策について考察する。現在、我々が引用できる『内裏式』⁵⁰が修訂作業を経たものであることは、末尾に清原夏野らが「天長十年二月十九日」として、次のように記していることから確認できる。

内裏式雖指曉之躅、往日既定、而折旋之儀、頃年頗革、或有節會供張、出入門闌、徒記舊時、未著新鸞者、聖上鑒其脊難、斯盡會通、斟酌隨宜、取捨先斷、廼詔臣等四人、令綴緝焉、謹稟衷旨、

「詳加増損」、刊「繆補」虧、繕寫甫就、

『内裏式』原本の成立は、嵯峨朝の弘仁十二年（八二一）正月卅日に遡る。⁵³この『内裏式』編纂は嵯峨朝における儀式整備政策の一つの完成形として評価できるが、成立後わずか十二年で修訂を加えることは、淳和にとって嵯峨が上皇として存在する状況下で進めなければならないことであった。前掲史料点線部に「斟酌」とあるように原本『内裏式』に対する配慮を見せながらも、一方で、「其脊雜」とあるように原本の粗雑さを指摘し、「取捨先断」「詳加増損」、刊「繆補」虧と大幅な見直しを行っている。このことは、弘仁十二年から天長十年までに『内裏式』編纂時に記された儀式形態とは異なる実態が存在していたことを示している。

淳和から仁明への譲位は天長十年二月二十八日（『日本後紀』天長十年二月乙酉条）であり、修訂はその直前であった。また、同月十五日（『日本後紀』天長十年二月壬申条）には『令義解』の奏上も行われていた。淳和朝の終焉間際には、『内裏式』修訂及び『令義解』の奏上が行われたことから、これらに対する淳和の意識の高さを窺えるだろう。

ここで嵯峨朝において編纂作業を行った人物と、淳和朝において修訂作業を行った人物を比較してみたい。⁵⁴嵯峨朝

における『内裏式』編纂は総勢七名で行われ、藤原冬嗣・良峯安世・藤原三守・朝野鹿取・小野峯守の名前が並ぶ。

『公卿補任』に確認できる弘仁十二年の参議以上にある者のなかで、『内裏式』編纂に選出された者は藤原冬嗣・良峯安世・藤原三守である。彼らは共通して、それぞれ左近衛大将・左衛門督・左兵衛督と左衛府長官を務めている。参議以上においては中納言従三位文室綿麻呂が右大将を兼ねるが、先に挙げた三名とは異なり武官としての経歴が長い。⁵⁵このことから、『内裏式』編纂は、参議以上で衛府上級官人の任にあり武官の性格の薄い者（貴族的性格の者を中心に進められたと言える。

次に淳和朝における修訂作業を行った者を確認する。この修訂は、清原夏野・藤原吉野・紀長江・春澄善繩の四名によって行われた。『公卿補任』によると、天長十年に参議以上にある者は、清原夏野・藤原吉野の二名である。彼らは、それぞれ左大将・右大将と左右近衛府の長官を務めている。議政官ではないが、紀長江も右近衛少将の任にある。この天長十年の議政官には、嵯峨朝において編纂に従事した大納言正三位藤原三守の名が確認できる。この藤原三守が修訂にあたらなかったのは、第一にこの時に衛府上級官人の任になかったこと、第二に嵯峨派官人であったということなどが理由だろう。『内裏式』修訂は清原夏野・

藤原吉野という淳和の信任厚い者を中心として、近衛府将官という特に淳和に近侍する者達によって行われたと捉えられる。

また、同時期に編纂された『令義解』の編者についても確認しておきたい。『令義解』の編纂は、総勢十二名によって行われた⁵⁵。その中で参議以上の任にある者は、清原夏野・南淵弘貞・藤原常嗣の三名のみである。彼らの多くは、刑部卿や文章博士・勘解由長官といった法行政に関わる官職についている。『令義解』の性格を考慮すれば、この構成は妥当なものである。さらに衛府上級官人を兼ねる者は清原夏野ただ一人であり、ここに儀式書編纂・修訂との差異がある。この点からも、儀式書の編纂や修訂は衛府と密接な関係を持って行われたと考えられる。天皇の警護集団として衛府は儀式においても天皇に近侍し、一方では本稿で指摘してきたように儀式の主体として活躍する性格を有し儀式全般に携わる立場にあったためであろう。

以上の考察から、儀式整備政策と衛府は密接な関係にあることを指摘したい。天長十年の『内裏式』修訂にみえる淳和朝の儀式整備政策は、淳和が天長七年前後に議政官と特に中央軍事組織である衛府を掌握できた結果、推進することができたと捉えることができよう。第二章との関連でいえば、五月五日節の分化が天長六年に現れたことが、こ

のような淳和政権の確立とその実行力を示している。

また、仁明への讓位間際に『内裏式』修訂が奏上されたことは、讓位による嵯峨派体制への移行を見通した上で、淳和朝における儀式整備政策の一つの完成形を示す必要があったと推察することも可能になろう。

以上、本章では儀式整備政策と衛府制度の関わりについて考察を加えてきた。儀式整備政策を推進するためには衛府上級官人と参議以上の議政官の掌握が必要であり、衛府制度と儀式整備政策は密接に関係していた。淳和朝においては天長七年前後にその条件が整う。その結果、淳和による儀式整備政策の推進が可能になり、嵯峨朝の未完成であった儀式整備政策を『内裏式』修訂という形により完成に導いたと言える。

おわりに

平安時代初期、衛府が天皇に武芸を披露する儀式として正月の射礼と五月五日節が存在したが、朝廷内において「国家儀礼としての重要性」と「娯乐的儀式」という認識が混在していた。嵯峨朝からの儀式整備政策にみえるように、この時期は朝廷儀式再編の時期でもあった。それを示す一面として、儀式の娯楽性を分離させる点があげられる。

これは、認識の混在を整理し解消するためであったと考えられる。そして、これらの分化の契機は、『内裏式』修訂を行った淳和朝に求められた。

儀式整備政策は衛府と密接に関係している。嵯峨朝における『内裏式』選定は、参議以上で衛府上級官人の任における武官の性格の薄い者を中心に進められ、淳和朝における『内裏式』修訂も衛府上級官人の中でも近衛府将官という特に淳和に近侍する者によって行われた。儀式整備政策を推進するためには、儀式全般に関わる衛府を統括する衛府上級官人の掌握が必要条件であった。淳和派官人が衛府を掌握するのは天長二年から天長七年の間であり、議政官を半数以上掌握するのは天長七年であった。この時期こそが、平安時代初期の儀式整備政策の完成期だと言える。

嵯峨朝は儀式整備の開始時期であり旧来の儀式の見直しや、唐礼の継受など新たな要素を儀式の中に取り入れていく。結果として『内裏式』の編纂にたどり着くが、その内実は、本質的な完成に至っていないかったといわざるを得ない。従来指摘されることが少ない淳和朝について、衛府制度と『内裏式』修訂という視点から捉えると、淳和朝の『内裏式』修訂の功績は大きく、嵯峨朝以来続く儀式整備政策の完成段階であると評価できる。

今後の課題としては、儀式整備政策を巡る朝廷内の具体

的な状況をより明確に導くために、上皇としての嵯峨の権力のありようを捉えていくことが必要である。諸賢の御批正を請い他日を期したい。

《注》

- (1) 榎本淳一『東アジア世界における日本律令制』(大津透編『律令制研究入門』所収、名著刊行会、二〇一一年)。

- (2) 橋本義則「外記政の成立―都城と儀礼―」(『史林』六四一六、一九八一年)。古瀬奈津子「平安時代の儀式と天皇」(『歴史学研究』五六〇、一九八六年)。西本昌弘「元日朝賀の成立と孝徳朝難波宮」(大阪大学文学部日本史研究室編『古代中世の社会と国家』清文堂出版、一九九八年)。

- (3) 大日方克己『古代国家と年中行事』(吉川弘文館、一九九三年)(二〇〇八年、講談社学術文庫より文庫化)。これまで直接検討されることが少なかった軍事的側面を持った儀式を中心に国家構造の中における儀式そのものの位置付けを目指す新たな視角を提示した。

- (4) 「日本古代における『射』の変遷とその意義」(『歴史研究』五八、二〇一二年)。以降、前稿と記す。前稿に

においては射礼の弘仁式・貞観式逸文の存在について可能性を指摘した。しかし、虎尾俊哉編『弘仁貞観式逸文集成』（国書刊行会、一九九二年）に、その逸文が集成されている。前稿における管見の不十分さを反省し、本稿を以て前稿の訂正としたい。

(5) 前稿、第一章第二節。

(6) 前稿第三章において射礼（大射）を、「前期大射」・「中期大射」・「後期大射」・「後期大射（天皇不出御型）」に分類した。

(7) 前稿、第三章第二節。

(8) 八世紀の日本と渤海の関係については、廣瀬憲雄氏の研究が挙げられる。（廣瀬憲雄「日本の対新羅・渤海名分関係の検討―『書儀』の礼式を参照して―」（『史学雑誌』第一一六編第三号、二〇〇七年）、「古代倭国・日本の外交儀礼と服属思想」（『歴史学研究』八二四、二〇〇七年）。

(9) 大日方克己氏は、射礼の儀式は『内裏式』が成立する嵯峨朝に確定したと結論付けている。注（3）書、一七―一八頁。

(10) 弘仁式の下限設定については、虎尾俊哉編『弘仁貞観式逸文集成』（国書刊行会、一九九二年）を参照された。また、『内裏式』の下限設定については、本章第一

節史料Bを参照されたい。

(11) 前稿、第三章第三節第一項。

(12) 現存する『内裏式』と原本の復元試案は、所功『平安朝儀式書成立史の研究』（一九八五年、国書刊行会）第一篇第一章第三節に詳しい。また、『弘仁式』・『貞観式』改訂については、早川万年「弘仁式・貞観式研究の成果と課題」（虎尾俊哉編『弘仁貞観式逸文集成』、国書刊行会、一九九二年）に、その視角と課題が示されている。

(13) 大日方克己氏は九世紀中ごろから射礼が変質し始め、弓場始・賭弓・建礼門前大庭の射礼の三重構造に再編成されると結論付けた。（注（3）書、五四―五五頁）。この結論は、射礼がその本来の機能を失い、賭射がその機能を担い始めたという捉えを前提としている（注（3）書、三八―四二頁）。しかし、前稿で指摘したように射礼は天皇の私的饗宴の一種であり、その範囲を超えて射礼に変わり得ることはない（前稿、第三章第三節第一項）。また、弓場始・建礼門前大庭の射礼は、十世紀に成立した『西宮記』に確認でき、『内裏儀式』・『内裏式』・『儀式』には確認できない。つまり、本稿の中心としている平安時代初期（嵯峨・淳和・仁明朝）においては、三重構造化ではなく、射礼とそれに付属する賭射の二重構造化として捉えることが妥当と考える。

(14) 前稿、第三章第三節第一項。

(15) 『西宮記』(33一、十八日、賭弓条)に「入自月華門」とあり、また、『延喜式』(卷三十八・掃部寮) 37賭射条に「校書殿東廂北第一間供御座」…とある。内裏内の殿舎が記されることから、内裏における実施が確認できる。

(16) 『延喜式』(卷四十五・左右近衛府) 23賭射射手条に「凡十八日賭射射手官人。近衛惣十人。必備將監。當日録交名奏聞」、『延喜式』(卷四十七・左右兵衛府) 8賭射射手条に「凡十八日賭射。射手兵衛惣七人。必備尉。其取箭兵衛四人」とある。ところが、『延喜式』(卷四十六・左右衛門府)には賭射条が確認できない。そのため、左右近衛・左右兵衛の四衛府が対象であったと判断できる。

(17) 楊永良「射礼について」『法律論考』第六十七卷第二・三号、一九九五年。

(18) 『小野宮年中行事』正月十八日賭射事条に「貞観近衛式云、射手官人、近衛并十人、必備將、早旦録交名奏聞、」(虎尾俊哉注(12)書より引用)とあり、貞観式に射手の人数規定が確認できる。本条が実施において必須である人数の規定を示すことから、弘仁式を訂正したというよりは、貞観式において初めて賭射の規定が加

えられたと考えることが自然だろう。

(19) 五月五日節における儀式次第の詳細は、山中裕『平安朝の年中行事』(塙書房、一九七二年)、一九六、一九九頁。及び、大日方克己注(3)書、五九、六三頁に詳しい。本稿は大日方氏が儀式書の検討より提示した儀式次第を基準とする。しかし、後述するように、各儀式書における細かい表記変化などが見受けられる。その点については、本文で随時指摘していくこととする。

(20) 『類聚国史』(卷七十三・歳時四)に「五月五日 駒牽六日附出」とあることから、菅原道真による『類聚国史』編纂段階(寛平四年(八九二)完成)においても、駒牽・五月五日・五月六日の三日間を一連の儀式として捉えられていたことが分かる。

(21) 『儀式』の成立については諸説あるが、通説として、現存する『儀式』十巻は貞観期に作られた公的な儀式書であることは間違いないとされている。その作成は、貞観十四年(八七二)十二月以降であるとされる。(古瀬奈津子「貞観儀式」『国史大辞典 第七巻』吉川弘文館、一九八六年)を参照した。また、儀式書編纂の概要については、森田悌「日本古代における儀式書編纂について」(『日本歴史』第三七〇号、一九七九年)に詳しい。

(22) 大日方注(3)書、六三頁。

(23) 狩猟儀礼としての葉狝については多くの研究がある。

代表としては、倉林正次「五月五日節」『饗宴の研究』文学編、桜楓社、一九六九年）、山中裕注（30）書、和田萃「葉狝と『本草集注』——日本古代の民間道教の実態——」『史林』六一—三、一九七八年）が挙げられる。

(24) 五月五日節の三日間の構成を記す『儀式』を総覧すると、『儀式』（巻第八、四月廿八日駒牽儀）に「牽畿内・

外國飼駒「而度、」とあり諸国による貢馬（国飼馬）の牽き廻しが行われる。また、『儀式』（巻第八、五月五日儀）に「奏云、…兵部省申久、五月五日爾、五位以上若干人等乃進^禮走馬若干疋」とあるよう、諸臣による貢馬の奏上が行われている。しかし、『儀式』（巻第八、五月六日儀）に貢馬の奏上に対応する条文箇所は確認できない。同条に「両寮頭各以「御馬簿進御監」とあるが、これは簿の確認であり貢馬による走馬ではない。

(25) 大日方注（3）書、六三—六六頁。

(26) ここに記される装馬が五月五日に使用される装馬であることを本条から確定することはできないが、『類聚国史』（巻七十二、五月五日）に本条が含まれていることから、この装馬の停止を五月五日貢馬の停止として捉えることに問題はないだろう。

(27) 『儀式』においては、注（24）史料から確認できるよ

うに、諸国貢馬と諸臣による貢馬と分別されるが、ここでは馬を貢納するという行為そのものに視点をあて、分別することなく「貢馬」として大きく捉える。

(28) 大日方注（3）書、八七頁。大日方氏は触れていないが、『内裏式』（中、六日観馬射式）に「大舍人寮用去年五位已上走馬所負物、変熟食、充此日饌」とあり、これは負態の一種であると考えられよう。これに対応する条文箇所は『儀式』（巻第八、五月六日儀）に記されないため『儀式』成立段階で行われなかったという判断は妥当であろう。

(29) 史料 α ・ β は、黒板伸夫・森田悌編『日本後紀』（集英社、二〇〇三年）も参照している。

(30) 黒板・森田編注（29）書、巻第三十二、補注5、一二九六頁。

(31) 大日方注（3）書、五九—六三頁。

(32) 『西宮記』（五月六日、幸武徳殿）に「雑戯。高^的、施^的、俘囚、夫妻宅移。雑具以^レ猿爲。立^レ後騎者児。従者童子以^レ板弓行射主人。…次種々雑芸…」とあり、さらに打毬などの解説が記される。

(33) 衛府制度の成立と変遷過程については、笹山晴生A「令制五衛府の成立と展開」、B「中衛府の研究」、C「平安前期の左右近衛府に関する考察」（いずれも笹山晴生『日本古代衛府制度の研究』（東京大学出版、一九八

五年)所収)。

(34) 笹山注(33) 書、二〇八頁参照。

(35) 笹山注(33) C論文。

(36) 福井俊彦A「淳和朝の官人」(早稲田大学高等学院『研究年誌』一一、一九六六年)。同氏B「淳和朝の嵯峨派官人」(『史観』第一二六号、一九九二年)。

(37) 福井注(36) A論文。氏により指摘されている嵯峨派・淳和派官人を次に整理した。

嵯峨派

皇親…良峯安世、直世王

外戚…橘氏公

その他…藤原三守、朝野鹿取、甘南備高直、藤原冬嗣、

藤原貞嗣、小野岑守、橘常主、南淵永河、

菅原清人、菅原清公

淳和派

皇親…清原夏野、清原長谷、三原春上、文室秋津

外戚…藤原家雄、藤原継業、藤原綱継、藤原吉野、

藤原浄本

その他…藤原愛発、南淵弘貞、大野真鷹

(38) 例えば、福井氏も結論を保留にしているが、藤原緒嗣に対する判断は難しい。藤原緒嗣は嵯峨朝においても既に大納言の地位にあり重用されていたと思われる。しか

し、淳和母・旅子は緒嗣の兄弟であり淳和と外戚関係にある。嵯峨朝以来の地位より嵯峨派と判断するか、淳和の外戚という立場より淳和派と判断するかについて明示することは困難である。それゆえ、本稿では、まず嵯峨朝において公卿まで登用されたという事実に基づいて嵯峨派を広く捉えることにする。

(39) カッコ内の割合は前・非参議を除いた割合を示している。

(40) 福井注(36) A論文。

(41) 福井注(36) A論文。

(42) 続群書類従完成会、一九九二年。

(43) 続群書類従完成会、一九九六年。

(44) 笹山注(33) 書、二四九～二五二頁。福井注(36) A論文。

(45) 同前。

(46) 福井注(36) A論文。

(47) 橘岑継…橘氏公長男。『公卿補任』承和十一年橘

岑継の項に「右大臣橘氏公公一男」とある。

藤原 助… 春宮大亮(天長八年)。『公卿補任』承和十年藤原助の項に「同(天長) 八六七春宮大亮」とある。

藤原富士麻呂…春宮少進(天長十年)。『続日本後紀』

嘉祥三年二月乙丑条に「…藤原朝臣富士麻呂卒。…天皇在「東宮」之時。稍蒙「恩遇」。

天長十年正月任「少進」。…」とある。

(48) 百濟勝義… 表七参照。『公卿補任』承和六年百濟王

勝義の項。

藤原長良… 藤原冬嗣長男。『公卿補任』承和十一年

藤原長良の項に「贈太政大臣冬嗣一男」とある。

(49) 『公卿補任』天長七年の項。

(50) 『改訂増補 故実叢書31卷』（明治図書、一九九三年）。

(51) 『内裏式』卷末に「弘仁十二年正月卅日」とある。

(52) 『内裏式』編纂従事者と修訂従事者は、『内裏式』卷末より確認できる。

(53) 笹山注（33）書、二四二頁。

(54) 笹山注（33）書、二四三頁。

(55) 『令義解』編纂従事者は『令義解』序に確認できる。

〔附記〕 本稿は、愛知教育大学平成二十四年度修士論文を改稿したものである。